

2019 年 1 月 27 日（日）「あなたの『ぶどう園』の主人は？」

マタイ 21:33-46

33 もう一つのたとえを聞きなさい。

ひとりの、家の主人がいた。彼はぶどう園を造って、垣を巡らし、その中に酒ぶねを掘り、やぐらを建て、それを農夫たちに貸して、旅に出かけた。

34 さて、収穫の 때가 近づいたので、主人は自分の分を受け取ろうとして、農夫たちのところへしもべたちを遣わした。 35 すると、農夫たちは、そのしもべたちをつかまえて、ひとりは一袋、だたきにし、もうひとりは一殺し、もうひとりは一石で打った。 36 そこでもう一度、前よりもっと多くの別のしもべたちを遣わしたが、やはり同じような扱いをした。 37 しかし、そのあと、その主人は、『私の息子なら、敬ってくれるだろう』と言って、息子を遣わした。 38 すると、農夫たちは、その子を見て、こう話し合った。『あれはあと取りだ。さあ、あれを殺して、あれのものになるはずの財産を手に入れようではないか。』 39 そして、彼をつかまえて、ぶどう園の外に追い出して殺してしまった。

40 この場合、ぶどう園の主人が帰って来たら、その農夫たちをどうするでしょう。」 41 彼らはイエスに言った。「その悪党どもを情け容赦なく殺して、そのぶどう園を、季節にはきちんと収穫を納める別の農夫たちに貸すに違いありません。」 42 イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、次の聖書のことばを読んだことがないのですか。『家を建てる者たちの見捨てた石。それが礎の石になった。これは主のなさったことだ。私たちの目には、不思議なことである。』 43 だから、わたしはあなたがたに言います。神の国はあなたがたから取り去られ、神の国の実を結ぶ国民に与えられます。 44 また、この石の上に落ちる者は、粉々に砕かれ、この石が人の上に落ちれば、その人を粉みじんに飛ばしてしまいます。」

45 祭司長たちとパリサイ人たちは、イエスのこれらのたとえを聞いたとき、自分たちをさして話しておられることに気づいた。 46 それでイエスを捕らえようとしたが、群衆を恐れた。群衆はイエスを預言者と認めていたからである。

【序論】

説教者は聖書テキストのメッセージを如何に会衆の皆様にお伝えするかということを考えながら生きています。語る内容はどんな時にも「福音」でなくてはなりません。神学校の聖書解釈学のクラスでは、レポート（説教）の中で「福音が語られているかどうか」が厳しくチェックされました。時には「会衆を裁く内容にならないように」という指摘がなされることもありました。説教者が特に気をつけなくてはならないのは、個

人を裁くための「あてつけ説教」にならないようにということです。牧師が説教の中で信徒を非難するということが起こり得ますが、これは本来あってはならないことです。会衆の心が御言葉に対して閉ざされない配慮が必要なのです。

ところが、今日の主イエスの譬話は、極めて「あてつけ的」なメッセージとなっております。聴衆は「**祭司長たちとパリサイ人たち**」です。主イエスは敢えて彼らが自分の問題に気づくような譬話をうられる。そして、場合によってはその譬話は相手に殺意を抱かせるかも知れません。私などには到底できないことですが、ダイレクトに真理を伝達する預言者としての主イエスの一面が垣間見られます。

【本論】

本論 1. ぶどう園の賃借

もう一つのたとえを聞きなさい。ひとりの、家の主人がいた。彼はぶどう園を造って、垣を巡らし、その中に酒ぶねを掘り、やぐらを建て、それを農夫たちに貸して、旅に出かけた。

(21:33)

主イエスの譬話は多くの場合、アレゴリカルな解釈（「この部分は何々を指している」といちいち説明すること）は避けられる傾向がある。そういう読み方が主流だった時代もありました。しかし、この譬話に関しては、かなりアレゴリカルであり、登場人物は一人一人明白な対象を示しています。

- ・ 家の主人…父なる神様
- ・ ぶどう園…イスラエル（神の民）
- ・ 農夫…イスラエルの指導者
- ・ しもべ…預言者
- ・ 息子…主イエス

以上のことを理解した上で今日のテキストを読んでまいりましょう。「一人の家の主人」というのは大変な資産家であるという前提です。主イエスが来られる 280 年ほど前から、この譬話に似た「不在地主」がかなりいたようで、彼らは外国に住みながら故郷で土地を貸して収入を得ていました。所謂「不動産所得」です。その場合、小作人は収穫から賃料を支払ったようですが、一般的に収穫の 3 分の 1 か 4 分の 1 程度だったようです。この割合は決して楽なものではありません。

さて、「ぶどう園」というのは「ぶどうの木」「いちじくの木」と同じように「イスラエル」の比喻として用いられることがあります。その典型的な箇所がイザヤ 5 章です。

さあ、わが愛する者のためにわたしは歌おう。そのぶどう畑についてのわが愛の歌を。

わが愛する者は、よく肥えた山腹に、ぶどう畑を持っていた。彼はそこを掘り起こし、石を取り除き、そこに良いぶどうを植え、その中にやぐらを立て、酒ぶねまでも掘って、甘いぶどうのなるのを待ち望んでいた。ところが、酸いぶどうができてしまった。(イザヤ5:1-2)

ここでは、旧約の時代に神がイスラエル民族を選び、細心の注意を払ってその霊的成長の土壌を築いたにも拘らず、悪しき民族に育ってしまったという皮肉が語られています(参照：詩篇 80:8-9、エレミヤ 2:21、エゼキエル 19:10-11)。今日の主イエスの譬話も語り口が大変よく似ていますので、聴衆は「ぶどう園」が話題に出た時点で自分たちのことが語られているということがピンときたはずなのです。

「垣」(垣根)というのは、外敵がぶどう園に侵入するのを防ぐためのもの。つまり、イスラエルの宗教を異教から区別するための律法と読むこともできます。「酒ぶね」(搾り場、踏み場)とは、収穫したぶどうを潰してぶどう汁を搾り出すための岩穴。信仰を熟成させるための生活の基盤と捉えることができるでしょうか。「やぐら」(見張りのやぐら)とは、ぶどう園の中心に据えられた見張り台。イスラエル全体の霊的状态を見張る人々を指しているでしょう。

この主人(神)は十分な備えができたので、農夫たちに土地(イスラエル宗教)を委ねて旅に出かけた(その成長を見守ることにした)。神はイスラエルに律法を与え、「このように生きれば幸せになれるよ」という指針をしっかりと示して、人間の手に委ねられたのです。

我が家でも、子どもたちだけで留守番をさせることがだんだん多くなってきました。その時に、これだけはやっておくんだよ、これは絶対にしてはダメだよとよくよく言い聞かせてから出かけます。あとは子どもたちを信じて任せなくてはなりません。神様にとってもある意味で似たような感覚なのではないかと思います。

そして、この「神とイスラエルの関係」は、より広い意味で「神と各々の人間の関係」と解釈することもできる。つまり、「ぶどう園」とは私たちの人生を指すのです。神は人間一人一人に人生を委ねておられる。そして、その人生の終わりに「あなたはどのような収穫を得ましたか？」と問われるのです。

本論 2. 派遣者の殺害

さて、収穫の時が近づいたので、主人は自分の分を受け取ろうとして、農夫たちのところへしもべたちを遣わした。すると、農夫たちは、そのしもべたちをつかまえて、ひとりはお袋だけにし、もうひとりはお殺し、もうひとりはお石で打った。(21:34-35)

「収穫の時」とは、土地の賃借をしてから4～5年目が想定されます(レビ 19:23-25)。イスラエル宗教としては、ある一定期間が経ち、多くの霊的な実りが見込まれる時期ということになるでしょう(教会も5年経つと一つの収穫が望まれるのかも知れません)。そして、各々の人生においては、人生の終わりに神とお出合いする時と捉えられるか。

この収穫時に神は「しもべ」を複数派遣したようであります。「しもべ」とはイスラエルの預言者であり、神の御言葉を携えて来る人々です。ところが、「農夫たち」(イスラエルの宗教指導者たち)はこのしもべを虐殺したというのです。彼らはなぜそういうことをしたのか。

当時の社会では、畑を耕作する小作人が3年以上に亘って畑の賃借料を払わず、それでも土地の所有者との間に何のトラブルも生じなかったことが証明できれば、畑は小作人に帰属することになるという決まりがあったそうです(パヴァ・バトラ 3:1)。この規則を成立させるために、小作人らはしもべを殺して賃借料を支払わない実績を作ろうとしたのかも知れません。

いずれにせよ、この事件はイスラエルの宗教指導者たちが次々と神からの預言者を殺していったことを示しています(I 列王 18:4,13、エレミヤ 26:20-23、II 歴代 24:20-21)。旧約時代には多くの預言者が殉教しました。なぜこのようなことが起こるのか。それは、偽りの宗教を築き上げ、そこから多くの利益を得ていた上層の人々が、その土壌を荒らされたくないという意識が働いたからでしょう。宗教が腐敗する→そのことを批判する者が現れる→その人は迫害される。この図式は宗教の世界だけではなく、会社でも政治の世界でも、あらゆる分野で起こり得る問題です。そして、そこにはお金が絡んでいることが多い。

そこでもう一度、前よりもっと多くの別のしもべたちを遣わしたが、やはり同様な扱いをした。しかし、そのあと、その主人は、『私の息子なら、敬ってくれるだろう』と言って、息子を遣わした。すると、農夫たちは、その子を見て、こう話し合った。『あれはあと取りだ。さあ、あれを殺して、あれのものになるはずの財産を手に入れようではないか。』そして、彼をつかまえて、ぶどう園の外に追い出して殺してしまった。(21:36-39)

しもべを次々と殺された主人(父なる神様)は、最後に自分の息子(ひとり子イエス)を派遣しました。「私の息子なら敬ってくれるだろう」とは、これまでの動向からしてあり得ないこと。あまりにお人好しな主人の判断があります。譬話は物事の真理を際立たせるための誇張表現が使われることが多い。本来あり得ないことを神はなさる。それが、御子イエスの派遣だったのです。危険極まりない罪の世に神の子が来られる。そして、この神の子も殺されてしまうのです。

ここでの農夫たちの言っている言葉を読んでいて、私はヨセフを奴隷として売った時

の兄たちの言葉を思い出しました。

彼らは互いに言った。「見ろ。あの夢見る者がやって来る。さあ、今こそ彼を殺し、どこかの穴に投げ込んで、悪い獣が食い殺したと言おう。そして、あれの夢がどうなるかを見ようではないか。」（創世記37:19-20）

ヨセフはヤコブの愛する子。その偏愛は人間的で歪んだものでありましたが、主イエスを愛する父なる神様をどこか彷彿させます。そして、ヨセフをイスラエルから追放した兄たちは、どこかイスラエルの宗教指導者たちと似ています。「**あれを殺して、あれのものになるはずの財産を手に入れよう**」。息子を殺しても財産は主人のものであり続けるはずです。つまり、この判断はただただ衝動的、欲望に駆られた行動なのです。そして、この態度は人間全般が陥る、神抜きに生きたいという願望を表しているでしょう。「神の御心に従うなんていう堅苦しい生き方をやめて、自分の思いのままの人生を歩もうではないか」。このようにして、人間は「神のことば」なるイエスを自分の人生の外に追い出しているのです。

本論 3. 福音の拡大

この場合、ぶどう園の主人が帰って来たら、その農夫たちをどうするでしょう。」彼らはイエスに言った。「その悪党どもを情け容赦なく殺して、そのぶどう園を、季節にはきちんと収穫を納める別の農夫たちに貸すに違いありません。」（21:40-41）

主イエスは答えの分かりきった問いを反対者らに投げかけます。そして、彼ら自らの口で神の審きが自分の身に降りかかろうとしていることを告白させます。御子イエスを十字架に架けて殺そうとしている彼らの上に神の審きが下る。そして、「ぶどう園」（神の民）はイスラエルから取り去られ、「季節にはきちんと収穫を納める別の農夫たち」（神に聞き従う異邦人）に与えられていくと。

イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、次の聖書のことばを読んだことがないのですか。『家を建てる者たちの見捨てた石。それが礎の石になった。これは主のなさったことだ。私たちの目には、不思議なことである。』だから、わたしはあなたがたに言います。神の国はあなたがたから取り去られ、神の国の実を結ぶ国民に与えられます。また、この石の上に落ちる者は、粉々に砕かれ、この石が人の上に落ちれば、その人を粉みじんに飛ばしてしまいます。」（21:42-44）

彼らの返答を受け、主イエスは旧約聖書の言葉を引用して追い打ちをかけます。ここで主が引用しておられるのは、詩篇 118:22-23 の聖句です。背景としては、捕囚から帰還した民の神殿再建の状況がある。バビロニア帝国によって、かつて隆盛を誇っていたソ

ロモン神殿は跡形もなく破壊されてしまった。しかし、捕囚から帰還した民に、神から再び神殿を建てるようにとのお達しがあったのです。様々な困難を乗り越えて、ゼルバベルを中心とする民は神殿再建のために労します。神殿の基礎ができた時、かつてのソロモン神殿を知っていた人々は、そのあまりに小さく見劣りのする基礎を見て、惨めになって泣きました（エズラ 3:12）。しかし、重要なのは姿形ではなかった。その小さな基礎によって神殿は確かに形成されていったのです。神はまことの礼拝が取り戻されることだけを求めておられた。

「家を建てる者たちの見捨てた石。それが礎の石になった」。主イエスはこの言葉をご自分に当てはめたのです。主イエスはイスラエルの宗教指導者らによって捨てられ、殺される。しかし、それですべてが終わってしまうのではない。それどころか、この捨てられた方（の復活）によって、救いが全世界に広がってゆく。「**神の国の実を結ぶ国民**」が異邦人の世界におびただしく増やされていくであろう。

いかがでしょうか。ここでポイントになるのが、「**実**」という言葉です。イスラエルは神の民として実を結ばない歴史を築き上げてしまいました。キリスト教会にも同じことが起こり得ます。神が求めておられるのは、私たち「神の民」が実を結ぶことです。何の実か。御霊の実です（ガラテヤ 5:22-23）。

祭司長たちとパリサイ人たちは、イエスのこれらのたとえを聞いたとき、自分たちをさして話しておられることに気づいた。それでイエスを捕らえようとしたが、群衆を恐れた。群衆はイエスを預言者と認めていたからである。（21:45-46）

ここまで語られても実を結ばなかった人々がいました。祭司長・パリサイ人はイエスの「あてつけ的」譬話を聞いて、自分たちのことが言われていると悟ったのです。悟ったのであれば、向きを変えるべきだったでしょう。しかし、彼らはますます頑なになってしまった。そして、自らの身に審きを招く道を選んでしまったのです（44 節）。

【結論】

主イエスの譬話は聴衆を二分します。真理を悟り、向きを変えて出発する者。それが「実を結ぶ者」です。私たちの人生はこれまで誰のものであったか。「神のもの」と明確に告白できる者でありたい。神が貸してくださった人生（ぶどう園）を神にお返しするのです。それでも、私たちの心には尚も「神に聞き従いたくない」「人生を自分のものとし続けたい」という願望が湧き出てくるかも知れません。その時に、私たちは自分が御霊の実を結んでいない事実気づくはず。今日こそ主イエスに向きを変えて歩み出そうではありませんか。

【祈り】

私たちに人生を与えてくださった天の父なる神様。私たち人間は、自分の人生とは自分のものだと思っていて生きています。しかし、これを創造された神がおられ、その返還を求めておられることを、聖書の啓示によって知らされました。自分のものとしていたものをささげるところに抵抗を覚えます。返したと思いながらも、未だに握りしめている自分に気づくこともあります。どうか、主よ、私たちをこの縄目から解放してください。真の主人であるあなたにこの人生をお返しする時、すべてが保障され、すべてが祝福の下に置かれるという約束に立つことができますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
イスラエルをご自身のぶどう園として育み、聖き宗教の形成を願い給うた、父なる神の愛。
神からの最終的な「ことば」として世に遣わされ、そのいのちにより多くの人を神の国に招き入れ給うた、主イエス・キリストの恵み。
己が人生を神に返還し、真の自由と御霊の実を得させ給う、聖霊の親しき交わりが、あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。